



昭和17年当時の第一海軍航空廠庁舎と職員。庁舎は、現在の陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地・関東補給処の地にあった。

戦時下の土浦中学生 9 ～第一海軍航空廠の歴史～ (霞ヶ浦その21)

A B C D 包囲網の中、米・英との戦争に備えて、航空機量産の必要性が叫ばれるようになると、1941(昭和16)年10月1日に第一海軍航空廠(一空廠)が開庁され、総務部・補給部・飛行機部・発動機部・兵器部・会計部・医務部・工具養成所から成る海軍航空戦力の重要な修理・生産拠点が阿見原に誕生しました。

文中の【 】内は筆者による注記です。

海軍技術研究所航空研究部

阿見町に海軍の施設が置かれたのは、1921(大正10)年に霞ヶ浦飛行場【陸上機用。現在の茨城大学農学部・東京医科大学病院・阿見町役場・阿見第二小学校・阿見中学校・陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地一帯】と水上機基地【現陸上自衛隊武器学校】とが建設され、臨時海軍航空術講習部が設置されたのが最初でした。英国からセンピル大佐以下30名の教官を招き、飛行機搭乗員【後の海軍航空兵の指導教官】の訓練が行われ、翌1922年には霞ヶ浦海軍航空隊が開隊され、陸上機・水上機・艦上機等の航空要員の訓練が始まりました。

それより先、1918年には東京築地に、海軍の艦船・航空機・兵器を開発するための海軍技術研究所が設立されましたが、1923年の関東大震災で壊滅してしまいました。そのため、海軍技術研究所は目黒に移転され、そのうちの航空機部門は霞ヶ浦に移され、1925年に海軍技術研究所航空研究部が設けられました。航空研究部は、飛行機・飛行船・発動機等の性能・構造・材料等に関する総合実験研究機関として、海軍航空技術進展の一翼を担っていました。航空研究部は、現在の陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地内の高射隊施設付近にあって、霞ヶ浦海軍航空隊からの支援を受けて、飛行テストも行っていました。1926年には横須賀海軍軍需部霞ヶ浦支部も設置され、阿見原は、大正末期には既に、海軍航空の訓練・研究・補給の一大拠点となっていました。

須賀に発足すると、霞ヶ浦の海軍技術研究所航空研究部は海軍航空廠に統合されました。この海軍航空廠は、1940年4月5日に「海軍航空技術廠【空技廠】と略称された。」と改称され、航空廠から継続して、航空兵器の設計・性能実験、航空兵器及びその材料の研究等、諸種の技術的試験を行っていました。航空廠・空技廠の施設・設備は、列強各国と比較しても遜色なく、大風洞や大水槽、材料試験場等、これほどの規模のものは日本にしかありませんでした。当時、勤務していた技術者たちは何れも俊英揃いで、1945年以降の公職追放により、国鉄(現JR)や民間企業に転じた後も、各方面で活躍し、産業界の復興・隆盛に尽力しました。特に、新幹線の開発、自動車産業・電子産業の発展に果たした彼らの役割には大きなものがありました。

海軍航空廠

1941(昭和16)年、米・英との戦争に備えて、海軍では、航空機の大規模な修理・補給施設を建設することになり、新たな海軍航空廠令(勅令第875号・1941年9月25日公布)により同年10月1日、海軍航空廠が開設されました。この海軍航空廠は、先述の航空廠とは異なるもので、国内外の海軍航空隊基地の近くにあつて、航空機に関する資材の製造・修理・購買・保管・供給を迅速に行い、第一線に送り出すためにできた海軍の専用工場で、国内には、霞ヶ浦に第一、木更津に第二(支廠は大湊)、広島に第一(支廠は舞鶴)、大村に第二(支廠は鹿屋・朝鮮領海)、台湾高雄に第六一海軍航空廠が設けられました。

既に、1939年10月15日に公布された特設航空廠令により、中国漢口・海南島海口に特設航空廠【被弾機のエンジンや機体の修理等の野戦修理工場】が設置され、その後、戦線の拡大とともに南方各地【シンガポール・スラバヤ・パラオ・サイパン・ラバウル等】に設けられていきました。

第一海軍航空廠(一空廠)

1939(昭和14)年11月17日、海軍航空廠(翌年4月5日、海軍航空技術廠と改称)の霞ヶ浦修理工場が開設され、翌年2月1日には同出張所となり、1941年10月1日、勅令第875号により第一海軍航空廠(一空廠)が開庁されました。その2ヶ月後の真珠湾攻撃により、日米開戦の幕は切つて落とされたのです。

一空廠は、横須賀鎮守府に所属し、総務部・補給部・飛行機部・発動機部・兵器部・会計部・医務部及び工具養成所から構成されていました。その主要業務は、航空兵器及びその材料の修造・購買・準備・保管・供給に関するものでしたが、戦争の激化に伴って損壊機の修理が増加していきました。1941年以降は、新型の航空機を製造し前線に送り出すことも行われるようになりました。

一空廠の位置は、現在の土浦市右衞門から阿見町の西部で、その中心部は陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地・関東補給処の地であり、工具養成所は、土浦市烏山四丁目一帯に設けられていました。建物の面積は18,000㎡、一空廠の総面積は89,000㎡にも及んでいます。

工場の建物は、当時としては極めて珍しい鉄骨組立で、工場の大扉も鉄骨に鉄張りでした。航空廠の周囲には秘密保全のために、一部がコンクリート製の万年堀が建てられていました。敷地内は全面舗装され、排水溝にもコンクリート製の頑丈な物が使われていました。また飛行

機移動の障害にならないように、電線は、電話線・ボイラー管とともに全て集約して、地下に埋設されました。

主な工場は、「大型機体修理工場」・「解体工場」・「発動機試運転場」・「小型機械修理工場」・「板金工場」・「製図工場」・「機械分解手入場」・「木工プロペラ工場」・「熱処理工場」・「利材工場」で、その他に、飛行場に隣接して格納庫が設けられていました。そのため、当時の航空機全機種についての修理及び補給が可能で、一部機種については製造もできました。これらの施設の動力源として、関東配電株式会社（現東京電力）の変電所が第三門（現陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地裏門）付近に設置されました。架線をその変電所まで引き込み、更に地下マンホールを通して、各施設まで送電しました。常磐線荒川沖駅からは海軍専用線が既に引かれ、霞ヶ浦海軍航空隊への燃料・資材輸送路として活用されていましたが、一空廠の建設に伴い、資材運搬と整備済み飛行機の搬出のために、一空廠内にも引き込み線が敷設され、その引き込み線は現在の右籾小学校の校庭付近にまで延伸されていました。

一空廠は、軍人と一般工員とで構成されており、1944年初めから1945年8月15日までは、23,000名から24,000名が在籍していました。軍人は将校・下士官のみで一般兵は勤務していません。工員は以前から一空廠に所属していた工員と徴用工【ちようようこう】強制的に動員された工員。徴用とは、戦争中などに政府が国民や占領地住民を強制的に動員して、兵役を含まない一般業務に就かせること【】、それに勤労働員された学徒・女子挺身隊員とが加わっていました。

廠長や部長級の官舎は中高津【現在の

土浦保健所付近】に、課長等の佐官級の官舎は桜ヶ丘や航空廠内の官舎に、或いは航空廠近辺の借家・下宿に居住していました。独自の将校は、寮監を兼ねて、徴用工・女子挺身隊・女子工員等の寮等に起居していました。工員たちの住宅や寄宿舎は、一空廠近くの右籾から緑が丘・小松ヶ丘・小松一帯に建てられており、現在の土浦日大高校の敷地には徴用工用の第五寄宿舎がありました。また烏山には養成所生徒用の寄宿舎もありました。

一空廠の一日は朝7時の出勤から始まります。何しろ2万人余の人たちが一斉に出勤するので、一空廠に通じる道は、自転車と徒歩の人波で埋まっていたと言われるほどでした。出勤時刻をタイムカードに記録した工員たちは、職場ごとに朝礼を行い、朝礼後、冬でも上半身裸で体操をし、終了後「点呼」、「作業、掛かれ。」の号令で業務を開始しました。勤務規程は工員も兵隊と全く同じであり、勤務規律は艦隊勤務同様に厳しいもので、仕事をサボって他の場所へ油を売るといったことは全くできませんでした。工場と工場との間は駆け足、団体の移動では整列徒步行進、上級者に出会えば「歩調、取れ。頭、右（中・左）。」の敬礼も欠かせませんでした。廠内では秘密保全が徹底されており、記念写真も設立当初のものが数枚残っているだけで、工場内部や工場を背景にしたものは全くありません。

朝7時から午後4時30分までが通常の勤務時間でしたが、戦局の逼迫とともに、6時30分までの残業、更に8時30分までの残業、4時間程度の残業は当たり前前のこととなり、1944年頃からは、残業

6時間が普通という厳しい勤務状態になりました。

更に、工員の忠告【おしやう】呼び出しに不応すること。特に、召集令状を受け軍務に就くため指定地に赴くこと【】による労働力不足を補うために、1944年8月に公布された「女子挺身勤労令（勅令第519号・1944年8月23日公布）」により、14歳から40歳までの未婚女性が軍需工場等に動員され、一空廠にも配属されてきました。また、中等学校以上の生徒や学生にも1943年以降、勤労働員が始まり、1944年4月からは通年動員となつて、軍需工場や航空廠に毎日出勤することになりました。一空廠には、土浦中学・麻生中学（現麻生高校）・土浦高等女学校（現土浦二高）・土浦女子商の3・4・5年生が動員されており、各学校からの動員数は、土浦中学485名、麻生中学166名、土浦高女756名、土浦女子商50名でした。彼らは、自宅通勤と寄宿舎からの通勤とに分かれていましたが、出退勤時刻は同じでした。



女子挺身隊（石下町、昭和19～20年）（上）『写真記録茨城20世紀』より。土浦女子商の動員学徒が着用した制服。桑の樹皮の繊維で織られ、白の綿布の襟当ては首筋の擦過防止のためのもの（左）（美浦村「民俗資料館古里」蔵）。

1944年7月、サイパン島陥落後、米軍による本土空襲が本格化し、海軍では空襲被害の拡大を防ぐため、軍事施設の疎開を始めました。一空廠の疎開は1944年より本格的に実施され、遠くは筑波山麓・加波山麓、近くは乙戸・西根・小岩田・実穀・本郷・吉原等の山林・谷地を利用して、小規模な工場が造られ、多数の女子挺身隊員や動員学徒が特攻兵器の製造に携わっていました。

一空廠に対する最初の空襲は、1945年2月16・17日の2日間に亘って行われました。艦載機による銃撃と爆撃とが続き、大型機体修理工場の北側の屋根の鉄骨はアメのように曲がり、倉庫前のコンクリート広場には大穴が空き、工場の大扉は機銃弾と爆弾の破片で蜂の巣のようになりました。「一式陸攻」や「桜花」も焼失し、廠内で10名が戦死しました。その後もしばしば空襲を受け、7月10日には、右籾の林の中で3名の女子挺身隊員が機銃掃射を受け、彼女たちは抱き合つて戦死していました。

1945年8月15日に終戦を迎え、一空廠は同年11月1日、他の海軍各庁とともに廃止されました。一空廠の工場や施設は連合国の管理下に置かれ、運搬できる機械類は全て接収されました。しかし建物の大半はそのまま残され、1953（昭和28）年頃から当初の姿のまま陸上自衛隊に引き継がれました。しかし1991（平成3）年、新しい建物の建築と旧施設の取り壊しが始まり、1998年までには一空廠の施設は全てが姿を消しました。

※参考文献

「櫻水物語」屋口正一（中48・高1回）

「阿見と予科練」阿見町

（高21回 松井泰寿）